

笑顔のきっかけ……

中 二

私の祖母は認知症になってしまった。兆候が見え始めたのは二、三年ぐらい前だった。初めは、誰もがする年相応のちよつとした物忘れぐらいにしか思わず、全く気にもしていなかった。

一年ほど前のことだった。祖母が

「友達と野球観戦に行ってきたよ。楽しかった。」と嬉しそうに話してきた。だが、その数日後、衝撃的なことを祖母の口から聞いた。友達に、

「野球楽しかったね。」

と祖母が言ったら、友達に、「行ってないよね。」

と言われ、笑われてしまったというのだ。それを聞いて私と母は祖母と一緒に笑ってしまったが、急に母の顔つきが変わった。

その後の祖母の言動は、明らかにおかしくなっていたため、一緒に病院に行った。最初は、薬を飲めば大丈夫だと軽く考えていたが、祖母の症状は目に見えて悪化していった。いつも笑顔だっ

た祖母は、無表情のときが多くなった。昼夜問わず、何十回も母や私に電話をしてきて同じ質問をしている。なかったことを、さもあったことのように話をする。自宅にいるのに、今外にいると言う。エアコンのリモコンを持ちながら、テレビが消えないと言っていることもある。例を挙げればきりがないほどおかしい言動が多くなってしまった。

家族の助けは必要だが、一年前ぐらいまでは、自分のことは最低限できていた。しかし、半年ほど前あたりから、火が使えなくなり、食事は母が作って持っていく。洗濯機の使い方も忘れてしまった。足腰が弱っていて、一人でお風呂に入れないため、母が介助している。さらに、腎臓が悪く人工透析もしている。週三回、病院への送り出しもしている。祖母は一人では何もできなくなってしまう。

最近では、祖母の足腰もさらに悪くなり、立ち上がれないときが多くなった。その度に、母を呼ぶのである。朝昼晩に食事の準備、洗濯、お風呂の介助、薬の管理も全て母が行うようになった。

そんな日々が続いたある日、いつも明るく元気

な母から笑顔が消えた。そして私は泣いている母の姿を見てしまった。私はとてもショックを受けた。母は一人で全部を背負いこんでしまったのだ。母がこんな状況になる前に、もつと早く気付いて、手助けができていれば良かったと悔やまれた。母は仕事をしていないのだから、私たちのことも祖母のことも面倒を見るのはあたりまえだと思っていた自分が情けなくなつた。このままでは、母が病気になるてしまうのではないか。この思いは、家族みんなが同じだった。そこで家族で話し合いをし、ケアマネージャーさんにも相談した。今は週二回、デイサービスを利用して。さらに、週三回、ヘルパーさんに来てもらい、通院のお手伝いをしてもらっている。私は私にできることを考えた。祖母との電話を日課にし、暇があれば祖母の家に行き、話し相手になること。忙しくても嫌な顔をせず、同じ話をしてきても笑顔で返事をする。祖母の人格を否定するようなことはせず、ありのままの祖母を受け入れること。生まれてから今までとてもかわいがってくれた祖母に恩返しをするつもりで、これらを実践している。そして、母の負担が少しでも減るように率先して手

伝いをした。食事の準備や後片付け、洗濯物の取り込み等少しでも母に休んでもらうために私にできることは何でもやろうと決心した。母の笑顔を見たい……。私にできることは微力だが、継続して手伝ったことで母や祖母の笑顔が増えたのを実感し、役に立っているのだと素直に嬉しかった。

私は祖母が認知症になったことで、介護サービスについて知った。ケアマネージャーさんは優しく、家族に寄り添い、親身になって相談に乗ってくれる。また、デイサービスは送迎はもちろん、健康を考え栄養バランスのよい食事を提供してくれる。他にも歩行練習などのリハビリをしたり、ゲームをしたり、歌を歌ったりと毎回楽しませてくれる。介護サービスはとてすばらしい制度であり、家族が救われた気がする。

私は認知症と聞いても何か他人事のような気がしていたが、祖母が認知症になり、自分事として考えるようになった。多くの方に支えられ、手助けを受けることで、人と人とのつながりの大事さを痛感した。一人では心が折れそうになつても、誰かに話を聞いてもらい、励ましてもらうことで、前に進めると思う。認知症は、本当に近くにいる

人以外にはなかなか理解されないかもしれない。
だからこそ一番身近にいる私たち家族が寄り添い、
一緒に歩んでいきたいと思う。そして、大好きな
祖母の記憶に、たくさんのよい思い出と、たくさ
んの私たち家族の笑顔を残したい。